

## <論文>「戦災孤児」の神話：「火垂るの墓」とその作者

著者	清水 節治
雑誌名	日本文学誌要
巻	36
ページ	104-113
発行年	1987-03-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019497">http://hdl.handle.net/10114/00019497</a>

## 「戦災孤児」の神話

―「火垂るの墓」とその作者―

「古今東西を通じて最も秀れた作品で……昭和一桁の財産」とまで言った永六輔は極端としても、「火垂るの墓」は概して高い評価を受けて来た。少なくとも否定的なものを眼にすることはまずなかった。<sup>(注1)</sup>

ところが作者自身はそうした「世評」とは逆に、甚だ冷やかな、あるいは否定的と言ってよいような捉えかたをしているのはどうしたことだろう。「あの『火垂るの墓』は読む気がしない」と「天皇の洗脳」で書いたのが昭和四九年、二万八千円の限定豪華本「火垂るの墓」(昭和五三年)のあと書きでも「……酔っ張らったみたいになって書いた自分の文章を、読みかえすことは、即ちわが酔態をビデオテープで、確めるようなもの、不愉快だから、ほとんど読まない。折角、豪華な本になるのだから、せめて今度は読み直し、いわゆる手を入れてみようと思ったが、やはり駄目であった」と書いているし、ごく最近でも「わが作品の中では、もっとも読者の数が多いと思われる『火垂るの墓』も、ぼくは一度も読み返したことがない」(『山椒魚』の改変、大いに異議あり)(昭和六〇年)と述

べている。

作品は読み返さないということは、彼のしばしば言っていることであるから、それは、何も「火垂るの墓」に限ったことではないのだろうが、このこだわりようには、ただごととは思えないものがある。少なくとも「火垂るの墓」と並び称されることの多い「エロ事師たち」や「アメリカひじき」については、こういうふうな言いかたをまったくしていないのである。<sup>(注2)</sup>

もともとこうだったわけではない。直木賞の受賞直後には、「このたびえらばれた『アメリカひじき』『火垂るの墓』は、自分なりに納得のできるものだったから、候補となって、自信とはことなるけど、一種の安心感……しごく素直によろこべた」と受賞の弁(毎日新聞)を述べ、続けて「直木賞を受けたぼくの二作は、いずれも、ごく素朴な、わが心情から産まれた小説である。だからなにより愛着が強い」と率直に喜びを述べている。それが、次第に冷淡かつ否定的な態度に変わるのだ。これはいったいどうしたことなのだろうか。これは小説の中のことではあるが、「新人賞もらった作品に

清水 節 治

ついても、嘘が多い。あれは半分私小説風、つまり俺の体験そのままの部分がかなりあって、だから主人公と俺を同一視する向きがあるけれど、俺はあんなにやさしくはなかった」(「俺はNOSAKAだ」昭和四五年四月)とも彼は書いた。確かに読者の中には、「火垂るの墓」の主人公を作者と「同一視する向き」もあるだろう。しかし、彼は「火垂るの墓」の半年前に「プレイボーイの子守唄」を発表し、妹の食い扶持を奪い、泣けば殴った悲痛な経験を告白してもある。だから「せめて小説『火垂るの墓』にでてる兄ほどに、妹をかわいがってやればよかったと、今になって、その無残な骨と皮の死にざまを、くやむ気持が強く、小説中の清太に、その思いを托したのだ」(「私の小説から」昭和四年二月)という作者の、「その思い」を読み取った読者だって少なくなかったものと思われるし、所詮書いたものがどのように読まれたにしろ、それはある程度しかたのないことであろう。「火垂るの墓」は小説なのだから、嘘、つまり虚構があつて一向構わないはず。どうしてこうもこだわるのか。

「上品に、上品に書いてある」(「天皇の洗脳」)とか、「お涙ちようだいの小説」(「対論」昭和四年十一月)などと否定的に語ってもあるが、それも本当の理由ではなく、彼の「火垂るの墓」へのこだわりは、もっと別のところに存在しているのであるらしい。

「もの書き」として、野坂昭如という人は正直な人のように見える。「嘘」を書いたことをしばしば小説やエッセイで告白するし、<sup>(注3)</sup> 自伝的な小説の中でさえ、新しい事実がわかれば書き直しをしなれば……と書く人なのである。<sup>(注4)</sup> そうした「嘘」の問題で、最も辛そ

うな表情をして見せたのが「アドリブ自叙伝」だ。そこで筆者野坂は、やや感傷的に流れる嫌いはあるものの、<sup>(注5)</sup> 真摯に自己を見つめ叙述してゆこうとしていて、「自叙伝というにしては、自分自身の確かめ、あまりにあやふやな……せいっぱい記憶のひだまざぐり」とか、「満池谷の生活から、新潟の実父にひきとられ、野坂の姓を名のるまでを、実録風に書くのは辛い」などと述べているところに、事実には忠実に忠実にという筆者の態度がよく見てとれる。問題は次のところだ。

「この二つの文章は、小説の場合、いわば当り前のことだが、実録においても、ずい分嘘がまじっていて、ぼくは読みかえしにくい。二つの作品にまとめて、それで整理はいちおうつけたつもりだったのだが、ぼくは自分のついた嘘、つまり、自分をあわれな戦災孤児に仕立て、妹思いの兄の如く描いた嘘が、一種の重荷として、はっきりのしかかって来た」と書き、さらに「本当のことを、やはり書かなければいけないと考え、満池谷へ、この原稿にとりかかる前出かけ……そしてやはり書けないのだ。嘘についてのやましただけではない、死んだ人たちのことを軽々しく筆にすることの、おそれとあったようなものに、がんじがらめとなり、ただ首うなだれて、すわりこんでいるより他、仕方のないような気持だった」とあって、二つの文章、つまり「火垂るの墓」と「プレイボーイの子守唄」には嘘がある、というのだ。これは実は大変なことなのだと思う。小説の中でこそ空襲、「焼跡闇市」の描写において、自己の偽りも醜さも容赦なく引きはがして来たものの、<sup>(注6)</sup> ノンフィクションの中で、ノンフィクションの「嘘」を、少なくともこのような形で告白した

ことはなかったことだ。その彼が、自叙伝という「実録」の中で、これまで真情あふる好エッセイと、評価されて来たものの中の「嘘」を表明したのだから。

その「嘘」は、「自分をあわれな戦災孤児に仕立て、妹思いの兄の如く描いた嘘」だという。小説「火垂るの墓」にその「嘘」を見るのは簡単だ。「プレイボーイの子守唄」などのエッセイに親しんだ読者なら（それらのエッセイが本当のことを書いたもの、としてだが）清太をあわれな戦災孤児、妹思いの兄として描くために、妹の年齢を一歳数か月から四歳に引き上げたり、祖母は登場させず、父は出征中としたり、親戚の家にも住めずにあぐらの果ての壕生活としたり—というように、事実を大きく変更して描いていることを承知している。何より妹への態度の違い—幼い妹の食い扶持を奪い夜泣きをすれば拳固で殴った少年は、腹を減らした妹に、自分の「指切って血イ飲ましたらどないや、いや指一本くらいのもてまへん、指の肉食べさしたるか」とまで考える、優しく献身的な主人公に虚構化されていること、さらに、作品中の主人公は野垂れ死を遂げるが、現実の少年は生き延びて作家になった、ということをよく知っている。だから、その「嘘」つまり虚構は多くの読者の知るところであって、「重荷として」のしかかるほどの負い目を与えるものとは考えにくい。その上「火垂るの墓」より前に、ノンフィクションの「プレイボーイの子守唄」が発表されているのだ。

婦人公論読者賞を受けたこの「プレイボーイの子守唄」の選考事情を「感動をもって読んだ……黒眼鏡をかけてブルーフィルムを論じ、世のPTAママの蠶鑿を買っている……仮装のかげにどんな心

情がひそんでいるかをえがいた一種の名文章」と村松剛が述べているが、それはおそらく多くの読者共通の感想でもあったことだろう。その「プレイボーイの子守唄」には、「贖罪の心」で自分の娘を育てている、とも、また「幼くして死んでしまった……妹への鎮魂歌」といった気持もある」とも書いてある。その妹への「贖罪の心」、「鎮魂」の思いを「火垂るの墓」に読みとった読者も、また少なくともなかったものと想像される。だから、「火垂るの墓」が「あわれな戦災孤児に仕立て、妹思いの兄の如く描いた嘘」は、むしろ小説が本来持つはずの上質な虚構として効果を上げたものというべきで、作者が後々「重荷」として苦しむ必要などないように思われる。

では、野坂昭如がのしかかる「重荷」として意識し続けているその「嘘」とは何か。「火垂るの墓」に於いてそれが問題にならないとすれば、その「嘘」は当然「プレイボーイの子守唄」に存在するということになるだろう。

「プレイボーイの子守唄」のどこに「嘘」が存在するというのだろうか。「妹思いの兄」としては、もともと記述されていないのだから、その部分には「嘘」のあるはずはないだろう。とすれば、「あわれな戦災孤児」という「嘘」そのものが、「重荷」として彼にのしかかっている（いた？）ことになる。

「あわれな戦災孤児」の「嘘」とは何か。どのようにしてそれが、「仕立て」られたか。それをあとづけることなど至難の業であろう。しかし、「あわれな戦災孤児」の「嘘」そのものは明らかにできるように思う。手がかりがあるからだ。

「アドリブ自叙伝」には「あわれな戦災孤児」云々に続けて、養

女に來た二人の妹については「記憶をいっさい省いている……だが満池谷での生活を記せば、どうしたって妹恵子に触れないわけにはいかない」と述べ、「嘘を訂正して、文字にあらわすことは、まだできそうにない」から、以前に書いた文章のうち「嘘のない部分だけ引用させていただく」と記し、「六年前に書いた自分の文章」つまり「プレイボーイの子守唄」が再録されている。

再録されているのは「疎開先へ恵子を迎えに行き……」から「……ぼくの、ねむい余りのうつぶんこめたコブシでなぐられて気を失っていたのだ」まで。途中「引用」されなかったのは次の部分である。

「夜、ほんの二十分ほど寝ると、たちまち火のついたように泣き出し、これには部屋を借りている家の人が文句をつけた。『家の子供は、昼間、御国のために工場で働いているんですからね、なんとかして下さいよ』五十がらみの未亡人が顔を合わせるといい、いや人のことをいう前に、ぼくも閉口した」

「嘘のない部分だけ引用させていただく」とあるのだから、「引用させていただ」かなかった部分には当然「嘘」がある、ということになるだろう。そこにはどんな「嘘」があるのだろうか。「プレイボーイの子守唄」と表裏一体をなすと見られている「火垂るの墓」では、「夜、節子が夢に怯えて泣き声立てると、待ちかまえたように未亡人やって来て、『こいさんも兄さんも、御国のために働いてるんでっさかい、せめてあんた泣かせんようにしたらどないやの、うるそうて寝られへん』ピシヤリと襖をしめ、その剣幕にますます泣きじゃくる節子連れ、夜道に出るとあいかわらずの蛍で……」

とあり、他の作品にもこれと似た描写があるから、<sup>(注7)</sup> いずれにしても妹の泣き声をとがめられたり、寄寓先の年配の女性に邪険にされたり、という辛い経験があったことは確かなことのようにだ。この部分に「あわれな戦災孤児」の「あわれ」を強調するための「嘘」が、かりに含まれたにしても、「アドリブ自叙伝」に収録しにくいほどの理由があったとは、とても思えない。満池谷の「未亡人」への配慮かとも思われるが、「アドリブ自叙伝」執筆当時には、既に亡くなっていると文中に断りがあるくらいだから、その必要も多分なかっただろう。この部分は「嘘」云々ということではなくて、単に重要でないという理由のカットだったのかも知れないと思う。

改めて「アドリブ自叙伝」と「プレイボーイの子守唄」とを読み比べてみると、「……ぼくの、ねむい余りのうつぶんこめたコブシでなぐられて気を失っていたのだ」に続く部分も「引用」されていない、ということが判る。それは「西宮にもいられず、福井県春江に、ぼくたちはながれていき……」で始まる妹恵子の死ぬ場面なのだが、これも「火垂るの墓」と対照させてみると、妹の死ぬ場所が、エッセイでは福井県春江で小説では壕の中、死んでいることに気をつくのが、一方は「銭湯から帰って来ると」で、一方は貯水池で泳いで戻ると、となっていること、エッセイではとにかく医者のところへ運ぶのだが、小説ではそれどころでないという点、さらに、一方はとにかく坊主に形だけでも経を上げ、戒名もつけてもらうが、もう一方は、配給所の男に甚だ事務的に火葬の仕方を教わるだけ、などの違いはあるものの、大筋では近似している。妹の死ぬ場面は他のエッセイ・小説にも頻出するが、その記述・描写に共通してい

る点を、整理してみると次のようになる。

一歳六<sup>(注9)</sup>か月の妹恵子(「火垂るの墓」では節子)は、疎開先の福井県春江<sup>(注10)</sup>で、飢えのため骨と皮にやせ衰え<sup>(注11)</sup>、敗戦の一週間後、八月二十二日に死んだ<sup>(注12)</sup>。あわてて医者にかつぎ込んだが既に死んでいた。

近くの寺の坊主に戒名を頼んだら単に恵子童女とだけ。遺体を焼く時裸にして大豆の殻を押し込むと痛そうだった。木炭で焼いた後の細かな骨片を拾い集めて小さな缶に入れてもち帰った―ということになる。これがほぼ、妹の死についての野坂昭如の経験した事実ではないかと思われる。したがって「プレイボーイの子守唄」の記述の、この妹の死についての部分にしても、「重荷としてのしかかる」ほどの「嘘」が存在するとは考えにくい。ただし、福井県春江でのことは、小説でもそうだが、とりわけエッセイや「実録」では、あまり具体的には書かれていないから、あるいはその辺に野坂昭如の意識を刺激する何かがあるのかも知れないが。

「嘘」はむしろ妹についてはなく、もっと他のところにあるのではないか。大体妹についての記述・描写は細部では異同があるものの、大筋での齟齬・矛盾はないのだ。もし、人間関係にあるとすれば別な家族の方に、であろう。

そう思って、改めて「プレイボーイの子守唄」を読み直すと、「……養父は、二百五十キロの焼夷爆弾の直撃を受けて、五体四散し、養母、祖母もなくなり、疎開していた恵子と、まったくの偶然で生き残ったばかりが、焼跡にほうり出された」の個所が、「アドリブ自叙伝」には「引用」されていないことがわかる。

これから満池谷での生活を述べようとしているところなのだから、

ら、その部分の引用がなくて不自然はないものの、自叙伝ないし「実録」となれば、なくてはならぬ部分だろう。「あわれな戦災孤児に仕立てた……嘘」は、どうやらこの辺に存在するらしく思われる。

養父母、祖母についても、野坂はエッセイ、小説、「雑文」を問わず、多くの記述・描写をしている。それらを通読してみても、いくつか点がいくつかある。一つは養母の死についてであり、一つは祖母のことである。養父については、「火垂るの墓」のように小説の場合、出征中にしたり、「旅の終り」のように外地へ出かけて音信不通だったり、としているものもあるが、エッセイ等で大きな齟齬はない。死体の確認はできないものの、六月五日の空襲で死んだ、という事実がどの文章からもうかがえる。

ところが、養母については、あいまいな部分がかなりある。「プレイボーイの子守唄」では、単に「養母、祖母もなくなり」でくわしい説明をしていないし、「飢餓地獄からの生還」では、「戦災で家族を失い」あるいは「戦災で死んだ養母」とだけ、「ぼくの家族は焼き殺された」では、「焼きつくして二時間後、火はおさまった。ぼくの家族も焼きつくされていた」と、空襲の詳細な記述に比べてやはり簡単なものである。「焼跡闇市派の弁」でも、「空襲を受けて肉親を、焼跡と、それにつづく混乱の中に失い」とあるだけ。さらに「再び焼跡闇市派の弁」では、「一歳半の妹と十四歳の私が生き残った……両親のいない子はこれからどうすればいいのか」と、もっと曖昧である。考えてみればこれはかなり奇妙なことではないのか。空襲、「焼跡闇市」を真正面から問題にしたエッセイや小説

に於いて、家族の死が彼のよく用いる言葉で言えば「あやふや」なのである。

野坂昭如が養父母の死について最初に文章にしたのは、昭和三七年四月「婦人公論」の「少年院から生まれたジグザグ青春」と思われるが、そこでも単に「神戸の戦災で家族を失い」であったし、唯一の自筆年譜と思われる「略年譜」(昭和四四年十二月「小説現代」)でも「空襲により家族を失い」であった。他のエッセイでも大体似たような記述がほとんどである。さらに自伝と名づけた「われら『焼跡派』」(昭和四一年三月「平凡パンチデラックス」<sup>(注13)</sup>)でも「帰るべき家も家族も失った」と簡単なものだし、「自叙伝」と銘うった文章(「作家フォト自叙伝」昭和四四年十二月「小説現代」)に至っては、養父母の死についていっさい触れていないのである。空襲時の記述・描写が詳細を極めているのに、何故こうも養父母の死が、簡単というか曖昧にしか描かれていないのだろうか。

養父については、六月五日の空襲で「見捨て」たなり死体も確認していないのだから、死あるいは死後についての記述が無くても、また漠然としたものであっても止むをえないのだろうか、養母の方は、空襲からはともかく生き延びたのであるらしいし、死にも立ち合った(ここでも逃れた、という描写の方が多いのだが)らしいから、多くのエッセイや彼の言う「実録」に、確かなことの記述があつてよさそうなものだが、それがまことに乏しいのである。神戸大空襲の記念講演<sup>(注14)</sup>で「母親は全身火傷でもって回生病院にしばらくいて、それからあげくの果に死んでしまつて」とあるのが、漠然としてではあるが、死の様子に触れている例外なのである。それでも母

が何時死んだか、ということさえ明確にされてはいないのである。

ところがフィクションつまり小説の方になると、描写がとたんに精細を極めることになる。「火垂るの墓」には「一階のはずれの工作室、ここに重症者が収容されていて、そのさらに危篤に近い者は奥の教師の部屋にねかされ、母は上半身をほうたいでくるみ、両手はバットの如く顔もぐるぐる巻いて眼と鼻、口の部分だけ黒い穴があけられ、鼻の先は天婦羅の衣そっくり……(二日目)母は火傷による衰弱のため息をひきとった」とあり、直木賞受賞のすぐ後に発表した「はやすぎた夏」<sup>(注15)</sup>では、「母の傷は破片を大たい部に受けたので、そのまま、公会堂地下の怪我人収容所へ運ばれ……(七月末)傷口ふさがらず……高熱を発し、敗血症と診断され……医師は親戚の者を呼ぶようにいい、そのあてもなく、ただ母の死に立ち会うのがこわくて、六月五日朝、火に追われた如く、山にむかつて走り……母はその翌日みまかり」とあり、自伝的な作品「行き暮れて雪」<sup>(注16)</sup>には、「養母は全身火傷を負って蛆をたからせて、ただうめくだけ、ぶつぶつ文句ばかりいう祖母に付添われて入院し……秋台風の夜に……死んだ」とある。

養母の死については、火傷がもとで数日から数か月後に死ぬ、という記述・描写が最も多く、これが野坂昭如の養母戦災死の事実かと思われる。が、注目すべきは小説作品の中では、空襲後、怪我はしたものの生き延び、主人公(作者の分身)が生家に引き取られてからも生存したように書かれた作品の存在することである。

たとえば、「わが偽りの時」で、「北陸へ、どうにか傷のいえた母をかかえて落ちのび、そこで妹は餓死し、大阪の親戚を頼って……

：不具に近い母と、北陸からの帰途腰の抜けた祖母、中学三年の子供で構成される気の毒な一家、まずは当時の最下級の生活……敗戦後三年目の秋に、庄助は母と祖母を捨てた」とあり、「焦土層」では主人公が生家に引き取られてからも生存しているように描かれるし、「同心円」連作の4では、寝たきりの祖母の死ぬ昭和二十三年まで養母がその面倒をみた、つまり、母がずっと生存していたように描かれているのだ。

現実の養母は一度しか死ねないのだから、その死亡日時も場所も厳粛に一つであるはず。ところが小説はそうにまぢまぢだし、エッセイでも「実録」でも、それを明確にしていないのである。何故か、そこに「養母、祖母もなくなり、疎開していた恵子と、まったくの偶然で生き残ったぼく」という「あわれな戦災孤児」に「仕立て」るための「嘘」があったからではないか、と思う。

小説の中で「あわれな戦災孤児」の虚構を告白することがあって、も「戦災で両親を失った如く偽ったのは……」「わが偽りの時」、エッセイでその虚構に触れるのは、「青春の軌跡について」（昭和四十七年一月）で「正確には、祖母と妹が、田舎に空襲当夜だけ逃げている、ぼくはまったくの孤児というわけでもなかった」と述べたのが最初かと思う。このあとに「祖母は一方において、ぼくの保護者でもあるのだが、また何かにつけてこっちをたよりたがり……」ともあって、これがおそらく事実なのだろうから両親は失ったにしても、昭和少年は祖母という保護者をずっともっていたことになる。その祖母も小説にはしばしば登場するものの、エッセイ等で野坂昭如自身との関係が述べられることはきわめてまれであった。この「青

春の軌跡について」で、初めて祖母と敗戦を北国で迎えたことがほのめかされる程度で、空襲から新潟の実父のもとにひきとられるまでの間の、祖母との関係もまた曖昧なままなのである。

彼は「プレイボーイの子守唄」以後ずっと「空襲うけて肉親を、焼跡とそれにつづく混乱の中に失い、ぼくだけが生き残った」（「焼跡闇市派の弁」）という衣装をまとい続ける。「あわれな戦災孤児」に「仕立てる」ためには、自分だけが「生き残った」ということの強調とともに、家族関係も曖昧なままにしておく必要があったからではないか、と思われる。

養父は六月五日の空襲で行方不明になったものの、養母は重傷を負いながらもしばらく生存し、祖母は昭和二年秋のころまで、つまり野坂昭如が（当時はまだ養家の姓、張満谷だったのだが）実父に引き取られる直前まで生きていて、彼は「まったくの孤児」ではなかったらしい。だから、張満谷昭如は野坂昭如と変わるまで、ことばの正確な意味では孤児ではなかったことになる。昭和二年秋の上京にしても、「養母の実家」にころがりこむ（「飢餓地獄からの生還」というものだったというし、そこには祖母と伯母にあたる人がいたという。空襲に遭って以後飢えたことも辛酸をなめたことも確かだろう。しかし、とにかく身寄りはずっとあったのだ。

「あわれな戦災孤児」のイメージのためには、その事実をぼんやりしたものにしておく必要があったのだろう。そこで彼は、養母が祖母がと特定することを避け、単に「家族を失い」というような漠然とした表現を多用することになる。「家族を失い」の中に、ある時は父だけを含めて言い、ある時は母を、さらにはそれに妹も含め、



最後に養家先の祖母を含めていったものらしい。そこに語り手としての嘘はない、しかし、そうした操作することに何がしかのうしろめたさ、やましきの無かったはずはなからう。加えて自分だけ「生き残った」ということの強調もある。読者としては「あわれな戦災孤児」のイメージを自然に抱く、ということになるが、語り手にはそうした操作へのうしろめたさが、次第に増幅してもいったことだろう。その表明が「あわれな戦災孤児」の「嘘」ということだったのではないか、と思う。

「あわれな戦災孤児」の「演出」にはもう一つ年齢のこともある。神戸空襲の時点で野坂昭如は十四歳七か月。エッセイ、「実録」はもとより、小説の主人公もほとんどこの年齢だが、いずれも年齢よりはやや幼い感じで語られたり、描写されたりしているところに特徴がある。それは、「火垂るの墓」の清太が、妹のために林檎だと思っただけでひたたくて来たのが甘藷だと知って、自身も思わず涙ぐむところなどによく出ている。「戦時中の十四歳は……いちおう立派な大人」(『青春の軌跡』について)で、工場動員にしろ防空訓練にしろ大人扱いされたという彼は、「あわれな……孤児」でないことは既に見た通りだし、「あわれな……児」でもなかったのが実際であつたろう。

「あわれな戦災孤児」の虚構は、野坂昭如自身語っているように「身過ぎ世過ぎのために、ありもしない体験を口に」(「返り見すれば28年」)せざるを得なかったという切実な事情を背景としていよう。戦後を放浪し、マスコミを漂流していた彼が、定着の地点を求めて懸命だった時、この「あわれな戦災孤児」の虚構が、結果的に大き

な役割を果たすことになる。それまでの黒眼鏡のプレイボーイのイメージを一変させ、マスコミの寵児、「雑文界の雄」から、作家への転身をはかろうとしていた当時の野坂昭如にとって、「婦人公論」掲載のエッセイ(「プレイボーイの子守唄」)の好評は、大きな手がかりとなったのではないか、と思う。以来、まとい続けたのが「あわれな戦災孤児」の衣装というわけだが、この衣装は身に付くと同時に重くもなった。そのかすかなうめきを私は「アドリブ自叙伝」に見る。しかし、私は彼を、彼流に言えば「おとしめ」ようにしているのではない。その逆だ。「嘘」にこだわり続ける「心理的な潔癖さ」(注19)をこそ評価したのである。

ところで、「あわれな戦災孤児」という虚構にはもう一つの側面がありはしないだろうか。それは、少年昭如の中にあったらしい家族からの脱出願望との関係に於いてである。野坂昭如は、養家の恵まれた環境の中で大事に育てられたらしいが、その彼が空襲下に両親を見捨てて後、焼跡に立ち帰った時、いっこうに悲しくなくてかえって「解放感」(注20)にいたったというが、これも考えてみれば、かなり奇妙なことのよう思う。そこには、彼が既に気づいていたという「人工的親子」への不満が、両親を見捨てて走ったという行動にも、両親を失ったと思った時に悲しみよりも解放感を味わったというところにも、よく表われているように思う。ともあれ、その焼跡に立った時の解放感の記述・描写にリアリティが感じられれば感じられるほど、人工的家庭環境に育った昭如少年の、深い孤独を思わせるを得ないのである。

養母は、その日の空襲からは逃れ生き延びたのだが、彼がその死

に近い養母からも再び逃げた、と小説では何度も書いていることなども、私には野坂昭如という人と家族（養父母）との関係を考える場合に、見逃すことの出来ない記述であり描写であるように思う。

瀕死の母に生きてほしい（それがかりに無駄だとしても）と、手をさし延べる代わりに、死に立ち合うことから逃げる少年を彼は描くのである。勿論死に立ち合うことの怖さというものはあるだろうが、これも普通にはあり得ないことではないか、と思う。養母の死を心の深部で望んでいた、とまでは深読みをしないまでも、やはり、かなり特殊なありようのように見えるのだ。

彼は、内心の深いところで、自分の周辺の人工的な部分の消滅を願っていたのではないか。でなければ、家は消失、両親は死んだ、と思った時に悲しみよりは解放感の方が大きかった、とあんなに繰り返すわけはなからう。その延長からこそ、焼跡に立って大自然の回復を見たという彼の感情がしみじみ納得できるのだ。「あわれな戦災孤児」の虚構にはその願望も潜んでいたように思う。

「火垂るの墓」の美しさは、妹節子との、この世からはじき出されたようにして横穴壕で暮らす生活と、その中で交わされる二人の心情の通い合いにある、といってもいいだろう。満池谷の、螢が飛び交い、蛙が鳴き交わす自然の中にあって、だんだんと社会的、人工的なものから遠ざけられ遠ざかって、とうとう横穴防空壕で暮らすことになる清太と節子。そこに野坂昭如は無意識のうちに人工的なものを超えたユートピアを見ていたのだ、と思う。横穴壕は、清太と節子にとっての天国であっただけでなく、作者自身にとっての解放区でもあっただろうと思う。

「火垂るの墓」は「焼跡のイエス」とは逆に、戦災孤児を弱者としてその「あわれ」を描いた。戦争の最大の被害者は「幼きもの」という野坂昭如年来のモチーフがよく生かされている。作者の経験した事実へのみ忠実に描いたのだったら、おそらく現在見るような結晶とはならなかったであろう。「嘘」を描いて成功したのである。事実を捨てることによって彼は、意識下の事実を描いてしまった、という解釈も可能であろう。主人公清太（作者の分身）が、妹を背負って炎を逃れる空襲の描写にしろ、満池谷での壕の生活にしろ、また、一人丘の上で妹の遺体を焼く場面にも、その周りを飛ぶ螢の描写にしろ、事実通りではおそらく与えることの出来なかった感動を、読者に与えることになったのである。

生身の「あわれな戦災孤児」の方の「嘘」は効力が次第にうすれるとしても、作品の方の虚構はしっかりと定着して、「あわれな戦災孤児」の姿を、永く夏雲の下にさらし続けるに違いない。

注1 直木賞の選評で、柴田錬三郎は『火垂るの墓』に感動した。戯作者的文章が、悲惨な少年少女の最後を描いて、効果をあげたことは、われわれ実作者に深く考えさせるところがあった」と述べ、大仏次郎は「この装飾の多い文体で、裸の現実を襲深くつつんで、むごたらしさや、いやらしいものから決して目を背向けていない……」と書き、松本清張は「……粘こい、しかも無駄のない饒舌体の文章は現在を捉えるときに最も特徴を發揮するように思う」、水上勉は「怨念も夢もふんだんに詰めこまれて、しかも好短篇の結構を踏み、完全である。感動させられた」と述べた。直木賞選考の歴

史の中でも稀に見る全員の支持と期待を集めた感があった。

他に「哀切な秀品」（梶木剛）、「傑作『火垂るの墓』」（菊池章典）、「焼跡闇市を……戦災浮浪児という形で純粹結晶」（奥野健男）、「亡くした妹に対する鎮魂曲を詩情豊かに描き出した作品」（山田博光）、「一種すがすがしい至福感」（種村季弘）、「この作品は野坂昭如の仕事のなかでもとりわけ印象に残るものであり、彼の文学の原点をなすといえよう」（尾崎秀樹）等の解説・評がある。

注2 「アメリカひじき」については、好悪いずれにしてもあまり語っていないが、「エロ事師たち」については創作苦心談をしばしば懐しように語っている（「想像と妄想」、「マスコミ漂流記」他）。

注3 『アドリブ自叙伝』、「俺はNOSAKAだ」、「わが偽りの時」その他。

注4 「養父母の生活が、去年の春、近しかった人から伝えられ、すると、この小説は大幅に書き改めなければならぬ」（「人称代名詞……ぼく」）。

注5 雑誌発表は昭和四八年一月～一二月。その際にはなかったが、筑摩書房から刊行された時には「焼跡の赤いスカート」とか「妹の死と淡い恋」などと甘い表題が各章ごとについている。文体内容ともある種の追憶にひたる甘さがある。

注6 「俺はNOSAKAだ」、「わが偽りの時」、「人称代名詞」。

注7 「死児を育てる」、「夏わかば」その他。

注8 「再び焼跡闇市派の弁」、「飢餓地獄からの生還」、「それぞれの断崖」、「八月十五日の風景」、「わが偽りの時」、「行き暮れて雪」、「新宿海溝」その他。

注9 「火垂るの墓」の節子四歳は例外で、他の作品やエッセイではすべて一歳数か月となっている。

注10 新潟としたり（「死児を育てる」）、北陸とぼかしたりの例もある（「わが偽りの時」）。

注11 「骨と皮にやせ衰え」（「天皇の洗脳」）、「骨と皮に瘦せおとろえ……ついに飢えっぱなしで死んだ」（「それぞれの断崖」）、「餓死・骨と皮になり」（「五十歩の距離」）、「やせていき、骨と皮になって死んだ」（「再び焼跡闇市派の弁」）、「餓死」（「新宿海溝」）、「アイ・アム・スキャン・ドロン」、「急性腸炎」（「行き暮れて雪」）、「飢死」（「死者をして眠らしめよ」）等。

注12 八月二十一日となっているものもある（「行き暮れて雪」）。

注13 これは作者の自筆年譜はもとより？ 綿密詳細な村上玄一の「年譜」にも何故か載っていない。

注14 「神戸大空襲と私の体験」（昭和四七年六月五日・神戸大空襲記念講演）。

注15 「小説新潮」昭和四三年六月。

注16 「婦人公論」昭和五四年六月～昭五七年五月連載。五九年刊。

注17 群像 昭和五三年九月。

注18 中央公論社版のエッセイ集の帯、「マスコミ漂流記」等。

注19 「婦人公論」読者賞の選評。

注20 「青春の奇蹟」について」他。

注21 「それぞれの断崖」

注22 「戦後の繁栄は悪夢にて御座候」